



1. はじめに

名古屋大学では、「名古屋大学環境報告書」の信頼性を高めるために、環境配慮促進法第9条に基づき、自己評価を実施しています。自己評価は、2008年から実施しており、環境報告書の価値向上に求められる、ステークホルダーが望む重要な情報を記載しているかを評価する「情報の充実」と、その情報の「信頼性向上」が図られているかについての2つの視点で評価を実施しています。

2019年度についても、学内構成員（教員2名、職員3名、学生2名）によって環境報告書自己評価チームを構成し、評価を実施しました。特に、ここ数年来、評価に多様な視点を持たせるために、教職員および学生がメンバーとして参加し、評価しています。



自己評価チーム
 (左奥から)
 富田 賢吾 (環境安全衛生管理室 教授)
 香坂 玲 (環境学研究所 教授)
 河内 哲史 (全学技術センター 技師)
 (右奥から)
 安江 朗人 (施設管理部 施設管理課 課長補佐)
 小栗 博行 (教育推進部 教育企画課 教務係長)
 角田 健輔 (TEDxNagoyaU 実行委員会/工学部3年)
 関 陽香 (TEDxNagoyaU 実行委員会/文学部2年)
 ※所属は自己評価実施当時のものです。

2. 実施した評価の内容

自己評価は、2019年8月29日に実施しました。評価は「環境報告書に係る信頼性向上の手引き(第2版)」(環境省、2014年5月)に準じて、「環境報告ガイドライン(2018年版)」(環境省、2018年4月)の記載項目を示した評価表を用いて実施しました。本年度の評価から環境報告ガイドラインは2018年版を用いています。

評価項目としては、環境報告ガイドラインで規定されている下記の6つの項目で評価し、結果等の報告および公表をします。

- (原則1) 目的適合性
- (原則2) 表現の忠実性
- (原則3) 比較可能性
- (原則4) 理解容易性
- (原則5) 検証可能性
- (原則6) 適時性

さらに、これらの評価基準のみでなく、名古屋大学の学生および教職員として、ステークホルダーの一員であることを意識した環境報告書全体に対するコメントも踏まえ評価を行いました。

3. 評価結果

環境報告ガイドラインにおける記載項目37項目のうち33項目を記載対象として評価表(別紙「環境報告書自己評価シート」)にて評価を実施しました。特に下記の点について評価するとともに今後の課題として提案します。

- ・ 編集方針にあるように、幅広い環境活動を紹介することを意識しており、昨今の世界的な流行であるSDGsも組み入れ、労働・生活環境という環境にまで取り組みを踏み込んでいました。総合大学としての多角性を表す意味でも非常に有意義であり、多くのステークホルダーに読んでもらうための試みとして高評価でした。
- ・ 一方で「環境報告書」の主旨を考えた場合、環境関係に関するデータの目標設定と達成に関する検証は不十分な点があります。目標を明確に設定しているのはCO2の削減のみで、それに付随したエネルギー使用量等の考察は詳細に記載されていますが、本来の報告書の主旨からは、水や廃棄物などの環境課題に関する目標の設定、実施、検証が必要です。年推移のグラフなど、必要項目は記載されていますが、そこから考えられる削減理由、検証などの考察が不足する傾向があります。例えば、一般廃棄物の排出量は年々の削減が確認できますが、削減の理由が明確になると今後の展開が図りやすいと思います。それらの課題についてもデータをまとめた上で、今後活かすためのPDCAを回すなど、報告という点においてはもう少し掘り下げた議論、考察を行うべきと考えます。
- ・ 環境課題に関する「長期ビジョン」を示すことがマネジメントとして必要になってきています。長期ビジョンを示しているものは上述の通り、CO2の削減のみです。一部、廃棄物や環境安全教育などは年間単位の目標などを定め、検証していますが、SDGsとしても大学としての長期ビジョンを示すべきではないでしょうか。
- ・ 環境課題の抽出という点で、大気汚染に関する記載が不足していると感じます。特定施設としても大学で実施していることはあると考えられるので、記載してはどうかと思います。
- ・ 同様に、「生態系」に関する環境課題、リスクに関する抽出が不足していると感じます。グリーン調達や緑地の被覆率等の記載はありますが、SDGsにおける「14海の豊かさを守ろう」、「15陸の豊かさを守ろう」の項目からも大学としての広大な土地の利用、外来種の数等を含めた生態系リスクに関しては課題の設定を考えてもいいのではないのでしょうか。実際に本学は、愛知県県の生態系ネットワークの東部丘陵生態系ネットワークに位置し、大学としても協議のメンバーであるため、実施している取り組みが少なからずあると思います。
- ・ 昨年度に引き続いた指摘ですが、環境会計コストについて、毎年記載がありますが、これに関する考察は述べられていません。ここまで細分化されたデータを蓄積していますので、予算等の配分が適切であるか、効率的な実施のためにはどうしたらいいかを考察することは可能ではないのでしょうか。
- ・ 化学物質の排出量、移動量に関する記載として、PRTR

- に関する報告を上げていますが、該当物質の「取扱量」の年間推移を記載しています。どの程度の取扱いがあるかについては非常に重要な指標ですが、本制度の主旨としての大気を含めた環境への排出量及び廃棄物等としての移動量についての記載がありませんでした。
- ・ PCBの処理について、2018年までの全処理を目標として、それを達成したと評価していますが、処理の詳細に関する記事を確認すると、実験系で使用したものが一部、未処理であると記載しています。評価との整合性を取るべきです。
- ・ 毎年、水の使用量に関する記載がありますが、井水と市水の使用割合については触れられていません。
- ・ SDGsについては昨今、クローズアップされて来ますが、認知度はまだ高くはないので、特に高校生らもステークホルダーとするのであれば、説明書きがあった方がいいのではないのでしょうか。
- ・ 記事に対して該当するSDGsの17のマークを入れる試みは面白いと思います。LGBT等の名大の対応の記事についてはG16(平和と公正をすべての人に)も追加してはいかがでしょうか？
- ・ 本学と民間企業や市民社会との連携は、年によっては記事として掲載されていることもありますが、本年は記載がないようです。SDGsとしての対応、地方創生関連の事例として重要だと思いますので、掲載があっというかと考えます。

4. 総括

「編集方針」にもあるように、「幅広い環境活動を紹介」、「より若い世代に読んでもらえる報告書」等に重きを置いて編集している点は、ここ数年来継続している方針であり、トピックスの選び方やそれぞれの記事の書き方等も含め、本報告書の読者として、学生らに読んでほしい、名古屋大学を広く知ってほしいという意図を感じ、評価チームのメンバーからは、

- ・ この報告書を見ることで名古屋大学が行っている試みがまとめて分かるので大変有意義と思う。総合大学としての取り組み、研究、社会貢献まで読める。面白い。
- ・ 他の教職員、学生らにも読んでもらいたい。ためになる。

など、本報告書を読んでもらうことによる効果は間違いなくあるものと考えられます。毎年の課題として、その興味深い報告書をどのように読んでもらうか、目に留めてもらうか、ということは自己評価チームからも意見が多数出されたので、昨年と同様に上げておきます。こういった意見も積み重ね、参考にするには有効だと思います。

- ・ サークルの紹介など、学生が興味を持てるものをもっと入れる。
- ・ 環境報告書、というタイトルはやはり読まない。
- ・ 副題を入れるのはいい案と思う。今回の「大学から考えよう」は面白い。
- ・ 副題は「サステイナブル」よりも「持続可能な」の方がいいのでは？その他の文章も含めて、横文字が非常

- に多い。学生、高校生等をステークホルダーにするには難しい言葉が多いように思う。用語解説集があってもいい。
- ・ 全構成員に渡す手段としてHPを使っているが、学生はHPはほとんど見ない。
- ・ 講義、セミナー等で活用することで学生らの目に留めるのは有効ではないか。
- ・ トピックスとして、企業との協同での実施研究や社会貢献なども載せると興味深い。

面白く、興味深いという点では1、2章の印象が強く、3章はステークホルダーを学生、若い世代と考えた場合は興味が持たれない傾向は毎年同様の傾向だと思います。一方で「環境報告書」としての報告であれば、3章は確実に載せ、検証すべき、という意見も出されることから、性質の違うコミュニケーションに対して、どのような報告書を公開すべきなのか、という点は非常に難しい点と感じ、編集においても大変な苦労があることと理解します。そのような中、編集方針を定め、毎年、トピックスの選択や、研究、社会貢献、そして環境課題に関するデータ等の記載する量を変える、順番を変える、そして報告書自体の広報を広く展開するなど、工夫を凝らしていることで、徐々に本報告書の認知度は高まってきていると感じます。ここで評価した項目は環境報告書としての編集以上に大学全体の活動、方針に関係する部分が多いと思います。

特にSDGsを評価に加える以上、大学全体の方針、そして目標(Goals)を見据える必要があり、長期的なビジョンを含め、大学全体の今後の構想としていく必要があるのだと感じます。そういった点で、この自己評価、あるいは有識者による第三者評価、他大との環境コミュニケーションによる評価で指摘された項目をどのようにしてPDCAを回し、今後活かしていくのでしょうか？現状でも組織的な編集を行っている本書はそのサイクルを回していると思いますが、今後はその見える化も含め、大学一体の取り組みがより一層必要になってきているように感じます。

自己評価の中で、環境報告書ガイドラインの枠を超え、重要な環境課題として、大学という研究現場においては常に新規技術に関するコンプライアンスを考えるべきである、つまり、新しい研究テーマ、開発はコンプライアンス、環境汚染に対して、どの程度問題があるのか、どう予防するのか、という目線を先端研究を行う大学だからこそ、常に持つべきであり、そういった新規技術に対してのコンプライアンスに関しても組織として対応できるといい、という意見も出されました。

法の枠を超えて、配慮すべき環境課題はこれからも山積していきます。総合大学として、多岐にわたる研究、教育の推進、環境に関する社会貢献を行っていることは輝かしい実績に表れています。今後、東海国立大学機構として運営が開始された際に、研究、教育、社会貢献はどのようになるのか、そして、環境への取り組み、展開はどのようになるのか・・・

未来に希望ある研究、人材育成の継続に大きな期待をすると共に、上述した報告書自体の展開、活用を含め、今後ますますの環境に配慮した大学運営を進めていくことを期待しています。

評価者氏名	富田賢吾（環境安全衛生管理室 教授 ※座長）、香坂玲（環境学研究科 教授）、河内哲史（全学技術センター技師）、小栗博行（教育推進部 教育企画課 教務係長）、安江朗人（施設管理部 施設管理課 課長補佐）、角田健輔（工学部3年）、関陽香（文学部2年）
実施日	2019年8月29日（木）
実施した手続きの内容	環境省「環境報告ガイドライン2018年版」に準じつつ、大学独自の社会的責任を考慮し実施した。

(※) 報告事項に関する解説は、ガイドライン本文で、具体的に記載されています。

環境報告ガイドライン 2018年版 該当ページ	【第1章】 環境報告の基礎情報		作成担当者記入欄		評価者の記入欄							所見 青文字：2018への指摘事項 黒文字：2019での指摘・対応
	報告事項	報告事項	目的適合性		表現の忠実性			比較可能性	理解容易性	検証可能性	適時性	
			記載ページ	記載しない理由	完全性	中立性	合理性					
6	1. 環境報告の基本的要件	<input type="checkbox"/> 報告対象組織	3, 47, 48		○	○	○	○	○	○	○	
		<input type="checkbox"/> 報告対象期間	3		○	○	○	○	○	○	○	
		<input type="checkbox"/> 基準・ガイドライン等	3		○	○	○	○	○	○	○	
		<input type="checkbox"/> 環境報告の全体像	3		○	○	○	○	○	○	○	
7	2. 主な実績評価指標の推移	<input type="checkbox"/> 主な実績評価指標の推移	47		○	○	○	○	○	○	○	・P55 諸指標の推移のグラフ 諸経費（外部資金）を載せているのは何故か。諸指標の推移のグラフが名古屋大学概要に必要なか。他のもの（学部・研究科数等）変えることはできないか。 (8) 諸指標の推移グラフの横軸がない。 ⇒対応済み ⇒組織の活動の規模感を表す代表的な数値として掲載しています。 2019では本学の質的变化を示す他の指標として、留学生数を追加しました。

環境報告ガイド ライン 2018年版 該当ページ	【第2章】 環境報告の記載事項		作成担当者記入欄		評価者の記入欄							所見 青文字：2018への指摘事項 黒文字：2019での指摘・対応	
	報告事項	目的適合性	記載ページ	記載しない理由	表現の忠実性			比較可能性	理解容易性	検証可能性	適時性		
					完全性	中立性	合理性						
14	6. バリューチェーンマネジメント	<input type="checkbox"/> バリューチェーンの概要	—	事業の性質上記載不要	—	—	—	—	—	—	—		
		<input type="checkbox"/> グリーン調達の方針、目標・実績	34		○	○	○	○	○	○	○		
		<input type="checkbox"/> 環境配慮製品・サービスの状況	—	事業の性質上記載不要 (人材の輩出はここでは含めていない)	—	—	—	—	—	—	—	—	
15	7. 長期ビジョン	<input type="checkbox"/> 長期ビジョン	1, 2, 36		△	○	○	○	○	○	○	・002だけでなく、他の項目についても大学の方針として触れても良いのでは。	
		<input type="checkbox"/> 長期ビジョンの設定期間	36	詳細は「名古屋大学 キャンパスマスタープラン2016」に記載	△	○	○	○	○	○	○		
		<input type="checkbox"/> その期間を選択した理由		詳細は「名古屋大学 キャンパスマスタープラン2016」に記載	△	○	○	○	○	○	○		
16	8. 戦略	<input type="checkbox"/> 持続可能な社会の実現に向けた事業者の事業戦略	1, 2, 7, 31, 32		○	○	○	○	○	○	○		
17	9. 重要な環境課題の特定方法	<input type="checkbox"/> 事業者が重要な環境課題を特定した際の手順	31, 32		○	○	○	○	○	○	○	・P32 記載している課題の抽出した理由の記載があると良いのでは。	
		<input type="checkbox"/> 特定した重要な環境課題のリスト	32		○	○	○	○	○	○	○		
		<input type="checkbox"/> 特定した重要な環境課題を重要であると判断した理由	32		△	○	○	○	○	○	○		
		<input type="checkbox"/> 重要な環境課題のバウンダリー	—	事業の性質上記載不要	—	—	—	—	—	—	—	—	
18-19	10. 事業者の重要な環境課題	<input type="checkbox"/> 取組方針・行動計画	31-41		○	○	○	○	○	○	○		
		<input type="checkbox"/> 実績評価指標による取組目標と取組実績	32, 33-41		△	○	○	○	○	○	○	・P34 環境保全コストについて、適正な配分をしているか等の記載があれば良い。(2018年と同様の指摘)	
		<input type="checkbox"/> 実績評価指標の算定方法	33-41		△	○	○	○	○	○	○		
		<input type="checkbox"/> 実績評価指標の集計範囲	3, 47		—	○	○	○	○	○	○		
		<input type="checkbox"/> リスク・機会による財務的影響が大きい場合は、それらの影響額と算定方法	—	事業の性質上記載不要	—	—	—	—	—	—	—	—	
		<input type="checkbox"/> 報告事項に独立した第三者による保証が付与されている場合は、その保証報告書	—	実施していない	—	—	—	—	—	—	—	—	

環境報告ガイド ライン 2018年版 該当ページ	参考資料		作成担当者記入欄		評価者の記入欄							所見 青文字：2018への指摘事項 黒文字：2019での指摘・対応
	主な環境課題とその実績評価指標	報告事項	目的適合性		表現の忠実性			比較可能性	理解容易性	検証可能性	適時性	
			記載ページ	記載しない理由	完全性	中立性	合理性					
20-27	主な環境課題とその実績評価指標	☐ 気候変動	13-18, 30, 33, 35-37, 42		○	○	○	○	○	○	○	・P41 エネルギー使用量 削減の理由が「本学構成員が一体となって～」で良いか。構成員の努力で片付けてよいか。 ⇒2019ではP37に詳細を記載しました。
		☐ 水資源	33, 36		△	○	○	○	○	○	○	・P36 井水と市水の割合今後掲載できるのか。 ⇒対応済み
		☐ 生物多様性	19-20, 21, 42		△	○	○	○	○	○	○	・生態系リスクへの対応。
		☐ 資源循環	25-28, 30, 33, 34, 36, 38		△	○	○	○	○	○	○	・P43 一般廃棄物削減の理由を「構成員の努力」だけでなく、具体的な取組み等を記載したほうが良いのではないか。 ・削減目標を定めてはどうか。 ・P38 廃棄物削減のため、どのような対策がとられたのか記載してはどうか。
		☐ 化学物質	38, 39		△	○	○	○	○	○	○	・PRTR：大気排出量を記載してはどうか。 ・PRTR：取扱量だけでは不足している。大気排出量も記載すべきではないのか。
		☐ 汚染予防	32, 38-40		△	○	○	○	○	○	○	・大気汚染に関して、特定施設に該当する設備に関する状況、議論を載せるべき。(2018年と同様の指摘)

① 記載されている箇所（ページ等）を記入します。記載のないものは「-」を記入します。

② 報告書に記載の無い項目（①で「-」を記入した項目）について、記載のない理由を記入します。記載しない理由がない場合は空欄のままとします。

③ ①で「-」が記入されている項目について、重要性を判断します。重要性は、その情報の有無がステークホルダーの判断に大きな影響を与えるかどうかで判断します。

重要な情報の網羅性：事業活動に伴う環境的・経済的・社会的影響とステークホルダーの判断に影響を与える情報が網羅されていること

完全性： 利用者が指標を理解するために必要な情報を掲載しているかをチェックします。例えば、採用した算定方法や係数について説明がなされているか、集計範囲や捕捉率、地域別の情報が掲載されているか等が挙げられます。

中立性： 偏りのない情報を掲載しているかをチェックします。例えば、特定の情報を強調し過ぎたり、欠落・改変したりすることで、利用者の印象を変化させないようにすることが挙げられます。

合理性： 環境パフォーマンス指標の推計が合理的であるかを評価します。例えば、公的ガイドラインで例示された算定方法を用いること等が挙げられます。

比較可能性： 利用者が開示情報を比較するための参考情報を記載しているかどうかを評価します。参考情報の例としては、期間比較が可能となるような過去の実績情報や、算定方法や算定範囲の変更・変更理由・変更の影響による影響の説明等が挙げられます。

理解容易性： 利用者が特別な専門知識を持たなくとも理解できるよう、表現方法を工夫し、明瞭に記載しているかどうかを評価します。

検証可能性： 環境報告書に記載された環境情報について、利用者が客観的に検証しようとした場合、その前提条件、作成方法、算定根拠等を明らかにできるかどうかを評価します。

④ 記載のある項目については、○を記入します。

記載のない項目のうち、③で「✓」のある項目は「○」を記入します。③で「✓」のない項目で、適切な理由の記載が報告書にある場合は（②参照）は「○」、無い場合は「×」を記入します。

⑤ ④で×を記入した（重要性があるのに記載がない）場合は、⑧の所見欄にそう判断した理由等を記入します。

⑥ 「正確性」の評価を行い、結果を「○、×」で記入します。

⑦ 「中立性」の評価を行い、結果を「○、×」で記入します。

⑧ 「検証可能性」の評価を行い、結果を「○、×」で記入します。

⑨ ⑤～⑦で「×」のものに対して⑧に所見を記入します。